２０２５／０４／２７　　礼拝メッセージ　　　近藤崇志　牧師
主　　題　：　再び来られる主にある希望
聖書箇所　：　テサロニケ人への手紙第一　４章１３－１８節

この朝、皆さんと見たいみことばは、Ｉテサロニケ４：１３－１８です。きょうはタイトルにもあるように、「再び来られる主にある希望」について一緒に考えてみたいと思います。先ほども言いましたが、イエス・キリストにある復活というのは、さまざまな希望を私たちに与えてくれます。そしてこれから見るこのみことばも、私たちにとっての希望です。どのようなものをみことばは教えてくれているのか、まずは先にみことばをお読みしますので、それぞれよく見てください。

<u>Ｉテサロニケ４：１３－１８</u>

「:13 眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。:14 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。:15 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。:18 こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。」

●ファニー・クロスビー

皆さんはこれまでに、ファニー・クロスビーという女性の名を聞いたことはあるでしょうか。全然ピンとこないという人もいるかもしれませんが、「作詞家だった彼女の歌ならよく知っている、大好きです」と言う方も多くいると思います。たとえば「罪咎をゆるされ」や「十字架のかげに」、「おおみ神をほめまつれ」などは、彼女の作った讃美歌でした。その生涯において実に８千以上もの曲を作詞した彼女の賛美は、どれも主への満足や感謝に満ちあふれたものでした。個人的にもとても好きな「罪咎をゆるされ」のもとの歌詞を見てみても、こんなふうに綴られています。特に３番の歌詞に「主への完全な服従　心は安らぎに満ちている　私は私の救い主の内で　幸せで祝されている　見守り　待ち望み　天を見上げながら　主の恵みに満たされ　その愛に包まれている」とあります。これを読んだだけでも、彼女は間違いなく自分の救い主を大いに信頼していた人物でした。うわべだけではなくて、主の恵みや愛というものを知っている者として心から喜んでいました。確かな希望にあふれていたのです。

でも皆さんに知っていてほしいのは、この女性ファニーを取り巻いていた状況は、最初から簡単なものではなかったということです。１８２０年アメリカのニューヨークで生まれた彼女は、生後６週間の時に風邪をこじらせて医者の治療ミスによって視力を完全に失ってしまいました。またその６か月後には父親まで失い、彼女は身体的にも、経済的にも苦しむようになってしまうのです。また彼女の味わった苦しみはこれだけではありません。３８歳で結婚して１年後に授かったひとり娘も生まれてすぐに亡くなってしまいました。ファニーの経験した環境は非常に過酷で、多くの苦痛に満ちたものでした。幼少期に視力を失ってしまったことは、彼女の人生を通して大きな試練となりました。人間的に考えてみれば、喜びや希望というものを失ってもおかしくはなかったでしょう。文字どおり真っ暗やみの中で、治療ミスに対して怒りを抱き続けたり、すべてを諦めていたとしてもおかしくはなかったでしょう。でもそんな彼女が記した曲はどれも感謝や賛美、何よりも希望に満ちあふれたものでした。いったいどうして彼女はそんなふうにふるまえたのでしょう。なぜ、生涯盲目であることでさえ喜ぶことができたの

でしょう。その一つの理由は、天におられる主と必ずいつかお会いする日がやって来る、という確信を彼女が持っていたからでした。

こんな話が残されています。ある時、ファニーのことを気にかけて、その境遇に同情したひとりの説教者が彼女に声をかけました。「私は実にあなたのことを気の毒に思っています。主はあなたにこれほどまで多くの賜物を与えられたのに、あなたに視力を与えませんでした。」、すると彼女はためらいもなくすぐにこう言いました。「もし生まれた時に一つだけ願いをかなえられるとしたら、『私は盲目で生まれたい』と願ったでしょう。」と。これを聞いた説教者はとても驚いて「どうしてですか？」と尋ねました。それに対して彼女は次のように答えました。「……それは、私が死ぬとき、私が初めて目にする顔が、祝福に満ちた救い主の御顔だからです。」と。すごいと思いませんか。この地上では彼女は何も見ることができませんでした。しかし彼女の心は、救い主をしっかりと見つめていました。天におられる愛する主にいつか自分も会うことになるのだと信じて疑いませんでした。そしてそんな将来への揺るがない希望が、恐れや絶望に支配されてもおかしくない彼女の心を支えて、励まし続けていたのです。

そしてきょう、これから私たちが見ていこうとしているみことばにも、まさにそんな将来の希望が記されています。死ですべてが終わるのではありません。その先に待っている確かな喜びがあります。死に勝利し、よみがえって、再び帰って来られるその主にあって、その主にお会いする日がやって来るという確かな約束を、私たちは持っています。そしてそんな揺るがない将来の希望が、今の私たちにも最高の喜びを与えてくれます。ではどんな喜びなのかを一緒に考えてみましょう。

〇揺るがない将来の希望：三つの側面

きょうは特にこの４：１３－１８の箇所から、希望に関して三つの側面を見てみたいと思います。三つというのは、「希望の確かさ」、「希望の中身」、「希望の効果」です。聖書が教えてくれる希望とはいったい何なのか。ここにおられる皆さんひとりひとりも、きょういろんな困難や葛藤に直面しているかもしれません。これから先に直面するかもしれません。だからこそ神様が教えてくださる将来必ず待っている約束に心を留めてみましょう。この時間が皆さんの励ましになることを心から祈っています。

１．希望の確かさ　１３－１５節

ではさっそく一つ目の側面「希望の確かさ」から考えてみましょう。１３節はこのように始まっていました。「**眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。**」。さて、読んだ時に気づいたでしょうか。パウロはテサロニケの兄弟姉妹に宛てて手紙を書いていたのですが、そんな彼らはこの時不安や混乱の中に置かれていました。彼らは悲しみに沈んでしまいそうになっていました。でも、どうしてでしょう。そのことを理解するために、少し歴史的な背景を思い返してみてください。

テサロニケの教会というのは、第二次宣教旅行中シラスとともに町を訪れたパウロによって建て上げられた教会でした。いつものようにその町を訪れて福音を大胆に語ったパウロの働きを通して、多くの者たちが信仰へと導かれていったのです。そして想像できると思いますが、パウロはその町での滞在期間中に、いろいろなことを教えようとしました。キリストのすばらしさも、福音のもたらす喜びも、キリストがもたらしてくれる約束についても、そして特に、キリストが再び帰ってこられる「再臨」に関しても彼らに語っていました。それゆえにこの教会の人たちも、自分たちもいつか天から来られる主にお会いすることができるのだと、その日を楽しみにしながら生きていたのです。こうして働きは順調に進んでいきました。おそらくこの働きは数週間、長くても数か月続きました。

でも残念ながら、それ以上長続きすることはありませんでした。何が起きたかといえば、パウロたちの働きにねたみを抱いたユダヤ人が暴動を引き起こして彼らを激しく迫害するようになるのです。その時の様子が使徒１７章に描かれています。このテサロニケの成り立ちについてもっと読みたい方は使徒１７章全部を読んでくだされぱいいです。１７：５に特にその暴動の様子が記されています。「**ところ**

が、ねたみにかられたユダヤ人は、町のならず者をかり集め、暴動を起こして町を騒がせ、またヤソンの家を襲い、ふたりを人々の前に引き出そうとして捜した。」と。パウロたちに持っていたユダヤ人の嫉妬、ねたみ、憎しみは、非常に大きなものでした。そしてこの迫害が引き金となって、パウロは町を追われることになるのです。まだまだたくさん伝えたい教えがありながら、彼は信仰を持って間もない兄弟姉妹たちのことを置いて、突如として別の町へ移っていくことを余儀なくされました。

ここで、残されたテサロニケの兄弟姉妹、信仰者たちの立場に立って考えてみてください。大好きな、愛しているパウロが出ていきました。パウロが出ていった後も、彼らは教えられた真理に深く根差そうとするわけです。「キリストが再び帰って来られる」と伝えられたからこそ、その約束を素直に信じて、その日はいつ来るか、今か今かと待っていました。でもその中にあって、彼らの身近なものが亡くなってしまうのです。悲しいことに、まだ再臨が起こっていないのに、自分たちの大切な家族や友人が死んでしまうのです。結果として、彼らは不安や恐れを覚えるようになりました。さまざまな疑問を次第に抱くようになりました。キリストの再臨が来るとパウロが言っていたけど、再臨が来る前に死んでしまった人たちはどうなるのでしょう。すでに亡くなってしまった私の両親は、私の友人は、キリストとともにいる機会をもう永遠に失ってしまうのでしょうか。いや、もしキリストが帰って来られるその前に自分自身が死んでしまったとしたら、もしかして自分自身も主に会えないのか、天国に行けなくなってしまうのだろうか……と。テサロニケの信仰者たちはまだ主を信じて間もない者たちでした。未熟だった信仰者たちは、理解のなさのゆえに不安を感じるようになりました。将来に対する不確かさ、不透明さが彼らの心に大きな悲しみ、失意をもたらしていたのです。

だからこそ、そんな愛する兄弟姉妹たちの状態を知ったパウロは、ペンをとってこの手紙を記しました。突如として離れ離れになってしまったテサロニケの信仰者たちが苦しんでいることをほっとけなかったパウロは、彼らが苦しんでいる将来のことについて、「確かな将来の希望があるのですよ」と言うことをもって励まそうとしたのです。それが１３節の始まりのことばでした。「**眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。**」と。「知らないままでいたら悲しみがあるから、だからあなたがたに将来のことをきちんと伝えます」と。

では、実際にパウロはここでどんな希望を彼らに伝えようとしたのでしょう。注目してほしいことばが特に二つ使われていました。もう一度よく見てください。１３節「**眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。**」、その後１４－１５節に「**:14 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。:15 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。**」と続いていました。

まずここで一つ目に注目してほしいのは「**眠った人々**」ということばです。今読んだ中に「**眠った人々**」ということばは何回出てきましたか。このことばは１３節の最初にも出てきましたし、１４節の途中にも出てきました。また１５節で「**死んでいる人々**」と訳されていたことばもありますが、これにも同じようにして「**眠った人々**」と訳せることばが使われていました。パウロはここで「**眠った人々**」、「**眠った人々**」、「**眠った人々**」と繰り返し言っていたのです。もちろんここでこのことばは、文字どおり昼寝をしている人とか、ベッドで夜寝ているような人ということを指しているのではありません。このことばが新約聖書の中で用いられたときには、主に亡くなった信仰者たちの姿を比喩的に表していました。たとえば、病で死んで墓に葬られていたラザロに対してもこのことばを用いられています。ヨハネ１１：１１－１３を見ると、こう書いています。「**:11 ……「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」:12 そこで弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。」:13 しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。**」と。またラザロだ

けではありません。ほかにも最初の殉教者となったステパノに対しても同じことばが用いられています。使徒７：５９－６０に「**:59 こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。「主イエスよ。私の霊をお受けください。」:60 そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、眠りについた。**」と書いています。ですから、みことばは、こうしてキリストを信じて死んでいった者たちのことを、「**眠った人**」と繰り返し、繰り返し表現していました。

では、なぜ「**眠った人**」と言ったのでしょう。なぜ著者たちは死んだ人と言わずに、「**眠った人**」と表し続けたのでしょう。眠っている状態とは、どんなことが言えますか。眠っているということは、それが一時的なものだ、ということです。眠っているということは、その人が目を覚ます時がやって来る、ということです。私たちの周りでもそうです。たまに死んだように眠る人もいます。朝、何度呼んでも一向に起きてこない人もいます。でも、寝ているとわかっていたら、私たちはその人が起きてこなくてもパニックになって慌てて救急車を呼んだりはしませんね。それは、その人が眠っているだけなら、起きてくることがわかっているからです。

そしてこれと同じように、パウロはここで、恐れを抱えていた信仰者たちを慰めようとしました。「兄弟姉妹の皆さん、心配しなくていいです。キリストを信じて死んでいったあなたがたの家族や友人は、死んで終わったのではありません。彼らは主にあって眠った者たちです。主にあって亡くなった彼らのからだは、今は墓の中で休んでいるだけ。いつか死の眠りから目覚めるその時がやって来るのです。」と。主のうちにある者にとって「死」というのは、終着点ではなくなりました。イエス様を信じて救われた者たちがこの地上での生活を終えたら、死んだらどうなるか――。その者のたましいは、天に行きます。たましいは、天で主との交わりに入れられることになります。残されたからだは主が帰って来られるその時まで、単に墓というベッドの中で寝ているだけに過ぎないということです。ひとりの註解者レオン・モリスもこんなことばを残していました。「キリスト者にとって、死はもはや誰にも抗えない敵でも、価値ある全てのものを恐ろしい終わりへと導く暴君でもありません。死は甦られた主によって打ち破られ、それによって、主にある者たちの状況は一変したのです。」と。あなたがたの兄弟姉妹たちは、亡くなった者たちは眠っただけにすぎませんと。

また、もう一つ注目してほしいことばが１４節にありました。「**神は……イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。**」「**神は……イエスにあって**」、だれを、と書いていますか。「**眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。**」と言われていました。少し考えてみてください。テサロニケの信仰者たちは、再臨の前に亡くなった者たちがキリストとともにいる機会を失ってしまったのではないかと心配していました。自分たちが愛している者たちがもうすでに亡くなってしまったから、それですべて終わってしまって、再び帰って来られるその主に会えないのではないかと悲しんでいました。でもそんな彼らにパウロは言うのです。「いいえ、イエス様にあって今眠っているような者たちが、その機会を逃すことはありません。むしろそのように眠った者たちを神はよみがえらせて、イエスといっしょに連れて来られる、そんな日が来るのです。」と。言いかえれば、パウロが言わんとしたことは「主にあって先に眠っていった者たちに何の希望もないのではありません。むしろ彼らこそ、再臨の時に初めによみがえり、栄光のからだを手にして、キリストとともにいるようになるのだ」と言うわけです。生き残っている者たちよりも眠っている人たちの方が優先されるのだということが、１５節でも言われています。１５節に「**主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。**」１６節の途中に、こんなふうに書いていますね。「**ご自身天から下って来られます**」、その後「**それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり**」と。テサロニケの兄弟姉妹たち、信仰者たちは恐れていました。先に死んでいった者たちが取り残されるのではないかと。先に死んでいった者たちが主と会う機会を失ってしまったのではないかと。パウロは言うのです。「そんな

ことはありません。いや、むしろこのような人たちの方が先によみがえって主にお会いする、そんな喜びを持っているのです」と。ですから、すでに眠った者たちも、今生きている者たちも同じでした。今生きている者たちも主に会う日は来ますし、すでに眠った者たちもその死からよみがえり、同じようにして天で主にお会いする日がやって来るのです。「イエス・キリストを信じる信仰者たちのうちに、イエスに会わない、その機会を失ってしまうような人はだれもいませんよ」と、パウロは言いました。

でも、なぜパウロそんなふうに言い切ることができるのでしょうか。人間的に考えてみれば信じられないような話でしょう。すでに眠った者たちが死から必ずよみがえることがあるのだと、なぜそのように確信することができるのでしょう。でもその答えはとてもシンプルでした。それは、イエス様が死からよみがえられたからでした。イエス様が十字架で死なれ、死に勝利して復活されたから、それに続く私たちも同じようになるのだと確信を持つことができるのです。もう一度１４節を見ていただくと、１４節の初めにはっきりとこう書いていますね。「**私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、**」と。イエス様が死んで復活された、この事実が私たちの希望の、私たちのよみがえりの根拠であり、私たちの土台になるわけです。

イエス様が死なれたこと、復活されたことに関しては、先週私たちはイースターの礼拝を通して改めて考えて、改めて感謝をささげました。その時にも触れましたが、確かに正しいイエス様は、罪深い私たちの身代わりとなって死んでくださったお方でした。いっさい罪のないお方が十字架にかかられたのは、ご自分の罪のためではなかったのです。十字架に値したのは、本来罪人である私たちでした。生まれながらに、かたくなに逆らい続けてきた罪深い私たちひとりひとりこそ、十字架での痛みに、罪に燃え上がるその神の御怒りに、死にふさわしい者でした。でもそんな罪深い私たちが犯した罪のすべてを負って、罪を知らない方が代わりに死んでくださいました。すべての罪を背負った御子が身代わりとなって十字架でいのちをささげてくださったからこそ、この方を信じ受け入れる者の罪が赦されて、永遠のいのちが与えられるのだ、という約束を持つことができるのです。

でも、イエス様は十字架にかかって、死んで終わり、ではありませんでした。墓に葬られて終わり、ではありませんでした。この方は神様のご計画のとおりに十字架で死なれ、約束のとおりに三日目に死からよみがえられました。死はいのちの源であり、神の御子であるお方を墓の中に閉じ込めたままにしておくことはできなかったのです。圧倒的な力を持ったイエス様は、だれにもできないことをなされました。この方は罪や死の力など物ともせず、それらを打ち破って、勝利された復活の主だったのです。

そして、この方がそのようにして罪や死の力に勝利したからこそ、私たちはこの主にあって同じようにそういったものに勝利できるのだという希望を見出すことができます。死なれ、葬られ、よみがえられた方がおられるからこそ、この方を信じる者たちも同じようにして死んで終わりではなく、よみがえって永遠に生きることができるのだと、そう信じることができるのです。だから皆さん、イエス様の復活がなかったら、私たちは最もあわれな者でした。でも、イエス様の復活があるからこそ、私たちは最も喜びにあふれて生きていくことができるのです。イエス様もこのように言われていました。ヨハネ１４：１９でこう言われます。「**……私が生きるのであなた方も生きるからです**」と。ローマ６：８でもこう言われます。「**もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。**」と。イエス様が死の力に勝利したことを信じている者にとって、死というのは何も絶望的な敗北ではありませんでした。「死」は、いつか必ずよみがえって栄光のからだが与えられる、その時までの一時的な眠りにしか過ぎない、というわけです。キリストが墓からよみがえられたからこそ、「死」もいずれ死を迎えます。再び帰ってこられるイエス様にあって、新しいからだを着せられる私たちは、そのすばらしい主と永遠をともに過ごす日がやって来るというわけです。

ですから皆さん、主にある信仰者たちは、たとえ愛する者の死を迎えたとしても「さようなら」ではなくて、「またね」と口にすることができました。その確かな希望があるからこそ、主にある私たちひ

とりひとりもきょう、どんな時も悲しみに沈むのではなくて、喜ぶことができるのです。それが一つ目でした 。

２.希望の中身　１６－１７節

次に二つ目の側面考えてみましょう。二つ目の側面は「希望の中身」です。希望の確かさだけでなく、希望の中身が１６－１７節にこのように書いています。「**:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。**」ここには、いつか訪れる日のすばらしい光景が描かれていました。いわゆる「空中再臨」とも呼ばれるものですけれども、希望であるよみがえりの主ご自身が、天から下って来られる輝かしい日の様子が記されていたのです。その日、どんな状況になると言われていました？パウロは特にここで三つのことばを用いていました。どんなふうに下りて来られるのか、１６節に三つのことばが出てきます。「**主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。**」と。「**号令**」、「**御使いのかしらの声**」、「**神のラッパの響きのうちに**」、これはどのようものなのでしょう。

▶「号令」

「**号令**」というのは、「力強い命令」とか、「権威ある叫び声」のことを意味しています。権威ある叫び声ってどんなものでしょう。このことばというのは、たとえば戦場で軍の指揮官が兵士たちに向かって叫ぶその声、狩りの最中に獲物を追いかけている猟犬に向かって叫ぶ猟師の声、嵐の中で船長が漕ぎ手たちに叫ぶその声、戦車の乗り手がその戦車を引く馬に向かって「早く走れ」という叫び声、そういったものにこのことばは使われているのです。言えるのは、小さなささやき声ではないということです。この声というのは非常に大きなものでした。緊迫感のある、権威ある叫び声でした。そのような声を実際にイエス様は発しておられました。思い返してみれば、イエス様が地上で死人をよみがえらせた時にも大きな声で叫んで命じておられたのです。たとえばヨハネ１１：４３－４４で、ラザロの場合にもこう言われました。「**:43 そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」:44 すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。**」と。すごいことに、イエス様が命じれば、死人でさえその声に聞き従いました。主はそんな力に満ちた叫び声、権威ある叫び声、そんな大きな声とともに天から下って来られるというわけです。

▶「御使いのかしらの声」

次に「**御使いのかしらの声**」とありました。「**御使いのかしらの声**」に関して詳細はよくわかりません。ある人たちは、この声が新約聖書の中で唯一御使いのかしらとして紹介されるミカエルのものだと考えています。ユダ９節のところを見てみると、そこではミカエルが御使いのかしらとして言われています。ただし聖書が御使いのかしらの数について触れていないので、言えることは天から主が降りて来られるその時には、御使いの中で最も権威ある者、最もすばらしいかしらの声さえも伴って来られるということです。

▶「神のラッパの響き」

そして最後に「**神のラッパの響き**」ということばもありました。「**神のラッパの響き**」というのも想像できると思いますけれど、ラッパを思い切り吹き鳴らせば、今でも大きな音がします。でも特にこの旧約の時代、ラッパの音がどんなときに用いられたかというと、たとえば戦いで勝利したときに鳴らしたり、散らばっているような群衆を集めて公の発表を行うような時に鳴らしたりしました。戦いに勝利したときに小さなラッパの音を鳴らすわけがありません。大きな音を出していたのです 。ですからいつの日か天から主が下って来られるその瞬間は、静寂に包まれたものではないということです。私たちの

だれも聞いたことのないような、耳にしたこともないような、それほど圧倒的な音とともに主は突如として下りて来られるというわけです。
　そして下りて来られて、その結果どうなるかが書かれていました。キリストがご自身天から下って来られたら、１６節の最後に書いていました。「**それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、**」と。天から主が下って来られた時、まずキリストにある死者たちが、眠っていた者たちが初めによみがえる、と言われていました。私自身が学んでいる時に少しおもしろいなと思いましたけれど、主にあって眠っていた者たちは、眠っていたわけです。この号令と御使いの声と神のラッパという目覚ましのアラームを聞いたら、眠っていた者たちは飛び起きるのです。それぐらい大きなものだということです。そうやって、すでに亡くなっていた信仰者たちのだれも取り残されることはありません。その音とともにことごとくみなよみがえって、そして空中で主とお会いすることになる、というわけです。テサロニケの人たちは心配していました。でもそうではなかったのです。だれひとりとして取り残されることはありませんと。「**キリストにある死者が、まず初めによみがえり**」、その後はどうなるか。１７節に、キリストにある死者だけが主に会うのではありません。「**次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです**」と。死んでいる者たちも主に会うことになります。その時生きている信仰者たちもいっしょに引き上げられて空中で主と会うことになるのです。そして、これを止めることができるような者はだれもいません。
　１７節で使われていた「**引き上げられ**」ということばには、もともと「突然掴んで強奪する」とか「不意に取り去る」といった意味が含まれていました。つまり、その時生き残っている者たちというのは、ラッパの響きの音のうちに、この世から一瞬にして、主によって取り去られてしまうというわけです。こうして天にあって、これまでに眠っていた者たちも、そしてその時生きていた者たちも、同じようにして栄光のからだへと変えられて、いつまでも主とともにいることになるというわけです。天にあってイエス様とともにいるその日が来るということです。
　私自身もいろんなことを想像してみました。皆さんも少し考えてみてください。この瞬間、天において私たちはどれほど大きな喜びを味わうことになるでしょう。どんなに大きな慰めを受けることになるでしょう。たとえば、私たちは天にあって、これまで主にあって眠っていった者たちすべてに会うことになります。すべてというのは、文字どおりすべてです。かつての信仰の勇者たちも、アベルやノアやアブラハムやサラや、モーセやダビデ、ヨハネやペテロやパウロにさえ会うようになります。イエス様もこんなことばを残されていました。マタイ８：１１でこう言われます。「**あなたがたに言いますが、たくさんの人が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます。**」と。天の御国の食卓で、だれの横に座ってみたいでしょう。だれにどんな質問をしてみたいでしょう。そんな日が来るということです。またそのように信仰の勇者たちに会うだけではありません。私たちはこれまでに眠っていった家族や友人にも会うことになります。一度は涙を流して別れた自分の親や伴侶、「またね」と最後に挨拶を交わした兄弟姉妹や子どもにも再会するようになります。そしてそれに加えて、私たちはまだ会ったこともないような世界中の兄弟姉妹にも会うようになります。私たちの想像をはるかに超えた信じられないものがそこには待っているのです。これらはどれをとったとしても、私たちにとっての大きな希望です。ひとりひとりにとってそんな日がやって来ると知っていることは、今から待ちきれない楽しみでしょう。
　でも、今挙げたもの以上に、私たちは愛する主といつまでもともにいることができるようになります。私たちは主のありのままの姿を見ることができるだけではありません。新しいからだへと変えられるだけでもありません。すばらしいのは、私たちが持っている主との関係すら完全なものに変えられる、ということです。主と完全な交わりを持つことができるようになります。もちろん今この地上においても私たちは主のことを知ったり、主と関係を持つことができます。祈ることもできますし、みこと

ばを読んで主のことを考えることもできます。この地上においても主との関係を持つことができているのです。主のすばらしさを少なからず日々味わうことができたりもします。でも正直になってみれば、私たちと主との関係というのは、たくさんの問題を抱えています。良い時もあれば、悪い時もありますし、関係が強いように思える時も、関係が弱い時もあったり、愛や喜びにあふれているような時もあれば、冷たくなってしまっている時もあります。不完全です。しかし、私たちが主にお会いするその時、そのすべてが一新するということです。罪や汚れは完全に取り除かれて、もう私たちが誘惑に負けることは二度とありません。何の妨げもなく主との交わりを完全に楽しむことができるようになります。主の愛を心から知って、主を心から愛する者としていつまでも主とともにいることができるのだというわけです。これは希望ではありませんか。これが、再び帰って来られる主にある確かな希望でした。

悲しみや不安を覚えていたテサロニケの兄弟姉妹たちは、パウロのこのことばを読んで慰められたでしょう。すでに亡くなった、愛する者たちとも再会できる。そして何より主にお会いすることができると、安心していたでしょう。そしてパウロは、そのようにして慰めを与え、励ましを与え、安心を与えた後で、こんなことばをもって最後を締めくくっていました。

３．希望の効果　１８節

それが最後の側面になります。三つ目は「希望の効果」です。１８節をよく見てください。パウロはこんなことばで４章を終えていました。「**こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。**」と。これまでのことを話してきて、「**こういうわけですから**」ただ互いに慰め合うのではりません。「**このことばをもって互いに慰め合いなさい。**」と。確かな希望に心を留めるのであれば、その者に与えられる責任というのは、いや、むしろ自然な応答というのは、互いに慰め合うことでした。私たちのうちに本当の安心を、平安をもたらしてくれるこのことば。主が再び帰って来てくださるという「再臨」の真理というものを知っているのであれば、私たちにできることは、その真理をもって互いに励まし合うことでした。

改めて少し日々の歩みを振り返ってみてください。感謝なことに、すべての信仰者には、どんな時も変わることのない希望が与えられています。きょうの箇所において、パウロは信仰者が悲しんではダメですよ、ということを言っていたのではありません。残念ながら罪に汚れたこの世での歩みにおいて、悲しみを覚えてしまうようなことは多々あります。苦しみもあったり、痛みもあったり、だれかに傷つけられるそんな人間関係の難しさもあったり、現実に病や死に直面する中にあって、恐れや不安を覚えてしまうこともあります。愛する者が亡くなってしまえば、私たちは涙を流すこともあります。実際イエス様自身も、愛する友ラザロがいのちを落としたその時に、涙を流しておられました。涙は流しますが、でも、涙で終わることはありません。主にある者にはこの世にない喜びがあります。ただ恵みのゆえにキリストの十字架にあって罪が赦されたのだという喜びだけでなく、キリストと永遠をともに生きることができるという揺るがない喜びだけでもありません。何よりも、キリストの復活にあって、先に眠った者たちと再会することができるのだという、主と会うことができるのだという、その確かな希望があります。ですから皆さん、私たちは望みのない人々のように悲しむ必要はないということです。

かつてウォーレン・ワーズビーという先生もこんな話を残していました。ある日、妻を亡くしたばかりの友人に出会った際に、先生はこんなことばを掛けました。「奥さんを亡くしたと聞きました。本当に残念です。」と。するとその友人はこんなふうに答えたのです。「いいえ、私は彼女を失ったのではありません。どこにあるかわかっているものを失ったとは言えません。私は彼女がどこにいるのかちゃんとわかっているのです。」と。考えさせられませんか。私たちは落とし物や忘れ物をします。どこにあるかわからなくなっているときに、”忘れ物”ということばを使うのです。でも、信仰者が亡くなったとき、私たちは忘れ物をするのでも、失ってしまうのでもありません。どこにいるのかを知っているか

らこそ、再会することができるというその希望に目を留めながら、悲しんだり、涙を流したりします。この友人はそんな確信を持っていました。

　私たちもきょう同じ確信を持って生きていくことができます。地上での人生は、よくご存じのとおりいつか終わりを迎えます。死でそれを終えるかもしれませんし、愛する主が迎えに来られる日が先に来て、それで終えるかもしれません。それがいつ起こるのかということも、具体的にはだれにもわかりません。でも、必ずその日は来ます。イエス・キリストが十字架にかかり死なれ、墓からよみがえられたからこそ、その日は必ず来ます。そしてその日が来るからこそ、この地上にあって私たちにできることは、このことばをもって日々互いに慰め合うことでした。この世ではなくて、別のところに、天に本当の住まいを持っている者として、私たちは互いに励まし合いながら歩んでいくことです。

　ご自分がこの世を去って天に戻ることを告げられた後、不安や寂しさを覚えて混乱していた弟子たちにイエス様はこんなことばを語っておられました。ヨハネ１４：１－３にこう書かれていました。「:1 **「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」**と。このことばは、真実です。死に勝利してよみがえられた愛する主は、いつか再び帰って来られます。復活された主にお会いする日は、思いがけない時に、すぐやって来ます。だからこそ、「**また来て、わたしのもとに迎えます。**」と約束してくださったお方、このあわれみ深いお方に心を留めて、その希望の日がやって来るまで、最後まで互いに励まし合いながら、忠実に歩んでいきましょう。